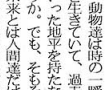
北海道新聞（夕刊）　2001年（平成13年）1月11日（木曜日）



町田　純

動物達は時の一瞬一瞬だけを生きていて、過去や未来といった地平を持たないのだろうか。でも、そもそも過去や未来とは人間達だけの幻想なんじゃないのか。僕はネコのヤンが話す物語を筆記しながら、時々そう思うことがある。

一瞬に込められた永遠を絶えず間なく生きること、そしてその連続が彼ら動物達の生を形作っているのだけれど、文学はちっぽけな本の中にその一瞬の「あるいはもっと長めの」永遠閉じ込めなければならない。ポーランドの詩人ミーワォシュの「窓」という詩。

ぼくは夜明けに窓の外を眺め若いりんごの木を見た／透明なかがやきのふたつ夜明けに眺めたとき天空がりんごの木立っていた／たわわな実をつけてだから歳月は過ぎにすぎたはずが何びとうぼくはおぼえていない／夢の中で起こったことを

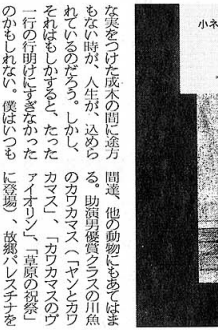
（十藤正弘訳）

このりんごの若木とたわわな実をつけた成木の間に遠方も広い時が、人生が、込められているのだろう。しかし、それはもしかすると、たった一行の行間にすぎなかったのかもしれない。僕はいつも思っている、この二本の同じ木の間、その行間を埋める物語＝小説の役割だと。

さて、「小ネコちゃんて言ってみナ」は僕の一番新しい

ネコの「ヤン」とちょっとトボけた仲間たち

〈上〉



これからめぐり会う読者へ

作品、短篇集だ。ネコのヤンを主人公とする七冊目の本。三年ちょっとの間によく書けたナ、と思うと同時に、未知谷（みちたに）という奇特な出版社が作り続けてくれたおかげでもある。（実際この国の文化をやっとのことで支えているのは中小出版社なのだ！）

ヤンは限りなく優しいけれど、確固とした意志、強い自我を持ったネコだ。そしてそれはヤンの物語に登場する仲間達、他の動物にもあてはまる。助演男優賞クラスの川魚のカワカマス「ヤンとカワカマス」、「カワカマスのヴァイオリン」、「雨原の祝祭」に登場）、放蕩バレスチナを失った鳥のシメ君（「ヤンとシメの物語」）、占いを商売としながらアルメニア独立運動の組織に属しているらしいウサギ（「イスタンブールの占いウサギ」）。名脇役のいつも眠そうな目をしたドブネズミ、下手な発表のミヤマガラス。こういった連中も皆それぞれの領域を持ち、対等に、決してべたべたもたれ合うことなく、お互いの存在をひそかに尊重して生きている。

「小ネコちゃん…」にはさらに新しい仲間が加わった。白くて小さいイシネコ、売れない短篇作家のやや黒猫モップのような毛のムク犬…。みんな素晴らしい役者達だ。役者？　そう、僕は連中の協力の下、いつも映画を撮っているんだ。最初にあるシーンが浮かぶ、それを文に直す。そしてまた次のシーン。映画は脚本から映像を撮る。僕はちょうどその逆をやっていることになる。現代の作家は長映像を意識していると思う。たとえばロシアのソローキンは絶対そうだと思う。そして挿絵を描きながらいつも思う、ああこれが映像だったらどんなに深く面白く表現できることかと。小説ではセリフとセリフの間は空白の行間にすぎない。そしてへたなヤツはトラないい挿描写をつけ加える。映画だったらその空白に唐突な映像を挿入して、異化効果を発揮することもできるのに。そんな思想をしながら、アレ、でもカワカマスを誰が演じられるっていうんだ？そもそも主人公のヤンは？ということに気がつく。こうして仕方なく僕はまたパソコンに字を連ねる。

――ヤンとドブネズミがなぜ自分達の耳が立っているのかを議論した後、舞台は夏のタ暮れの公園のあずまや。遠くにはどんもりとした森が見え、小さなサモワールが湯気をたて始めた。遠くからかすかな汽笛の音。そして咬癖団のワルツが聞こえてくる。ワルツはいつまでも続く――

「ネコさん」「なに」

「思うんだけど、ボク達の耳はやっぱり何かを聞くために立っているのかな」

「そう、そうだね。それも、ずっとずっと遠くの、はるか向こうの何かを聞くために」

「ねぇ。囁くように呼びかける小さな声も、虫の羽音も、そして夏の夕暮れのワルツも、何もかもだヨ」

さあ、では皆さん、二匹の名優に拍手を！

（まちだ・じゅん＝作家）

それでは今度の短篇集から僕が大好きなヤンのセリフを。